

巻頭言

4年前から新入生に将来の自分をイメージさせるという授業も担当している。その授業では、全学部の学生が一クラスに混ざるように組まれていて、サイエンスに興味がない学生達の気分をうかがい知ることができる。この授業では自分史を教員も話さねばならない。この授業を持ち始めた当初は、まだ、はやぶさミッションの話を覚えている学生もいたので、私の自分史をおもしろがってくれる学生がけっこういた。ところが、昨年あたりから、「なぜ太陽系という狭いことに興味を持続けられるのか？」という質問が出るようになった。狭いとはどういう意味か聞いてみた。すると、彼らの世代にとっては、太陽系のことは小学校の教科書も載っている日常の一部でしかない。そういうことを、今も研究し続けているのが信じがたいというのである。惑星科学の新しい発見はWebやTV等で紹介されているが、サイエンスに興味のない学生達の目を引くことにはならないようだ。ところが、こういう学生達に、サイエンスの中で興味のあることは何かないのかと聞くと、生命科学という返事が戻ってくる。別に学生達が具体的なことを答えられるわけもなく、「なにかすごそう、おもしろそう」といった雰囲気なのである。

興味を持ってくれもしない一般学生の話などもういいよと思う人もいるかも知れない。しかし、もし、全国的にもこういう学生達が増えているならば、長期的には、特に太陽系探査に影響が出てくる可能性を考えなければならない。彼ら彼女らは将来の納税者であり、今後も太陽系探査という短期的には役に立たないことに予算を割いてもよいかもと思ってくれることが重要だからだ。そうはいつでも、将来の納税者対策(?)は、小中学生に行うのが重要だろう。未解決の興味深い魅力的な謎がたくさんあって「なにかすごそう、おもしろそう」と思ってくれる小中学生が増えて、さらに、「自分が解決してみたい」と思う人も出てくれば一石二鳥である。また、はやぶさ2ミッションを成功裏に終わらせることも一般の人々の興味を再度呼び起こすために鍵となるだろう。末筆ながら、私も微力ながらミッションの成功に貢献したいと考えている。

野口 高明(九州大学基幹教育院)